

串商魂の系譜 明治三十六年から昭和五十二年まで

本編は、一九七六（昭和五二）年三月発行の柏葉会（串良商業高校同窓会）新聞の記事に、新たに写真や一部解説を加え、本校ワープロ部が編集したものである。

記述の大部分を占める「青春有情」（鹿児島新報社新聞掲載）串良商高編は、新報社への原稿提供者である河野良幸氏（昭和二十八年卒、農業科）の好意による。

「櫻とともに」 同窓会長 河野良幸

校風とか伝統は、更に磨かれながら耐えることなく後輩達の手によって受け継がれていくが、歴史は、記録や口コミによる伝承が主であり、古き良き時代の出来事等、時として見失われる場合がある。そういつた意味から、新報社が昨年よりシリーズものとして発表している「青春有情」（高校めぐり）は、若き日の回顧録として感動を蘇らせるに十分である。本校シリズでも、母校に学んだ多くの先輩達が経てきた時代を背景に数々の思い出をつくり、また、エピソードを生み出してきたことが窺える。

スペースの関係で落ちていますが、母校の今日隆昌の礎をつくられた、故串良町長北田武盛氏など歴史のページを飾るにふさわしい功労者の一人といえよう。食糧事情厳しい戦後間もない昭和二十四年に、笠野原台地の中心地、全

くの農村地帯にある本校に、まだ開校当時より本校教育の根底を成してきた農業後継者育成、農村婦女子教育ということから考えると全く百八十度転換である商業教育をしようというのだから、当時としては冒険としか受け取られなかっただろう。私も二十六年町役場が庁舎建築のためだったろうと思いが、串良小の上校舎に仮住まいの時、北田町長に農業科施設充実を図ってもらおうべく農業クラブ役員三名で行ったときの言葉を覚えて

「河野君、君たちの農業教育に対する情熱は有難いと思う。しかし、近い将来大隅半島では農業教育をする学校は鹿屋農学校一校だけしか残らないだろう。そのために君達の学校にも一昨年商業教育を成すべく、新しい商業科を設置したのだよ！」教育とは二十年或いは三十年後の展望に立って行うものだと諭された。今日、町長がいわれた様な図式に変わって来ている事を考えるとき、先見の明をもたれた名町長であったと思う。

中国の古い諺の中に、もしその計画が一年ものなら種を蒔けもしその計画が十年ものなら木を植えよもしその計画が百年のものなら人々を教育せよ（管子）とある。国の繁栄の礎となる人材育成が如何に大切かは今更論ずるまでもありませんが、本校教育の変遷の中でも多くの教育指導者の手によって歴史の一コマ一コマが築いてこられたことなども銘記す

べきであろう。

青春有情

（文中・敬称略）



ケヤキが一本立っている。青空に力強く枝を張ったケヤキは、高さが三十メートルもある。樹齢は七十余年。ケヤキは同じ場所に生きつづけ学園の変せんを一部始終見守ってきた。その学園で学び、あるいは教鞭をとった人々のすべてをケヤキは決して忘れはしない。そして再びその人々が学園を訪れる時、さまざまの思い出をそつと語りかけてくれるのである。

串良商にとつて、この巨大なケヤキは、同校の永い歴史を物語る象徴であり、また同校の発展を見守る守護神でもある。歳月の流れとともに変わった人々にとつても、このケヤキはそれぞれ心をつなぐ広場をつくってくれた。同校のことを「ケヤキ学園」と呼ぶ人が多い。

同校の前身「串良実業補習学校」が現在地に移転してきたのは、明治四十年十一月六日。ケヤキが植えられたのは、その直後だったという。場所は学園側からみて正門の左手であった。家一つない笠野原台地の片隅に、ポツンと開設された同校の周辺は畑ばかり。ケヤキの成長をはばむ条件はなになかった。現在地に移転する前、実業補習学校は小学校の一教室に間借りしていた。この学校の創立は明治三十六年というから、大隅半島では

鹿屋農業高校について二番目の古い歴史を誇ることになる。現在地に移転したのは創立四周年目のことだった。これより以前は男の生徒だけで、一学年二十人前後、授業は一週間に一日行われる程度であった。しかし移転とともに女子の入学も認められた。

移転後、三年目には同校は「串良実業学校」となった。これは全日制で、男子は稲作や畑作などの農業を主に学び、女子は桑づくり、養蚕、機織りなどを主に学んだ。当時の生徒には元県議の池田正義、元同町農協長の内門善二、元町厚生課長の中和田市助、現同町副議長の丸山五月らそうそうたる地域のリーダーがいる。

中和田の話によると「このころのケヤキは、まだ若木であった。しかし、その周りに木をさくを設けてあり、すでに学園のシンボルとして末永く育てようという配慮が行き届いていた。いま当時の面影をどめていているのはケヤキだけだ」という。

大正十二年、同校は「鹿児島県串良実業女学校」と改められ女子だけの学園となった。そして戦争という暗い時代をくぐりぬけたのち、戦後は全国でも珍しい女性だけの農業学校となった。現在の「県立串良商業高校」となったのは昭和二十五年のことである。このとき校門の外に左側であった茶園畑がつぶされて運動場になった。右側に立つケヤキはまだ安全であった。運動場がさらに大拡張され、ケヤキの存在があらゆる事に陥つ

たのは、三十六年のことである。当時の鹿屋信用組合串良支店長、河野良幸は、同窓会副会長というポストにあった。「ケヤキがたおされるぞ」―彼のもとにPTA副会長の中久保静雄が電話連絡してきつた。河野はびつくりして学校に走った。運動場の拡幅作業中のブルドーザーが、いまやケヤキの根まわりを掘り出そうとしていた。PTA会長の豊重徳一もすでに訪れていた。校長の松下兼文を囲み「な」とかケヤキを守ろう」と真剣に語り合った。この結果、運動場としてはかなりの不便も生じることになるが、ケヤキを守ることに決まった。

同校が四十八年、創立七十周年を迎えたとき、河野は次の詩をケヤキにささげた。これは同校に学んだ者たちの、つきせぬ思いを一つにまとめ上げたものといえよう。

樽(けやき)
冬は木枯らしの詩をうたい
夏は緑の木影をつくり
望郷の友等えの
交りの夢をむさぼる
樽よ、私はお前が可愛い
明治の昔、開校間もない
校庭の片隅に植えられた
一本の樽、お前の生命は逞しい
初めは校門の横だったけ
登校、下校の折り見上げた
七千数百名の卒業生
たった一本の樽、お前の
心の拡がり、素晴らしい
いまも全国津々浦々に
活躍している卒業生の
心の中に生きつづけ

便りの一行に必ず書かれる
樽よ
お前は幸福者よ
―以下略―



「学校沿革」という冊子がある。紙は赤茶けて、ところどころ虫にくわれていて、ひもをとけばたくましい毛筆で、創立当時の行事、職員の異動、生徒の活躍などが丹念に記したためである。これは時の流れとともに、職員がリレー式に書き継いできたものである。読みすすむうちに、時につれて変遷した用紙、用語、仮名づかい、文体などが手にとるようわかる。例えば戦前は平仮名を用いず、戦後は片仮名を用いないというぐあいだ。

この生きた「学校史」には、まず「明治三十六年四月十日、本日で開校三周年」と書かれてある。当時の大隅半島には鹿屋町に農学校があるだけで、他に中学校や女学校、実業学校は一校もなかった。こんなわけで「串良実業補習学校」に寄せる地域住民の期待は大きかった。当時は定時制で授業は週に一、二日しかなかった。しかし生徒たちにとっては自分たちの学園を誇りでもあった。

冊子によると、明治三十八年十月五日に修学旅行が実施されている。バスも国鉄もない時代だから二本の足だけ頼りとした修学旅行である。コースは松並木の美し

い志布志道を通り、その後は岩川街道―。一日目は岩川に泊まり、翌日は末吉を経て都城に一泊。三日目は庄内平野を視察して霧島泊まり。四日目は牧園から国分平野を経て鹿兒島に。ここで二泊して六日目に帰校している。なかなかの強行軍だが、一人もへばる者はおらず、生涯忘れ得ぬ大旅行を楽しんでいくという意識をもって、生徒たちは意気洋洋としていた。

明治四十三年九月二十日、男子だけの定時制から女子を加えた全日制の学校に昇格し、校名は「串良実業学校」となった。冊子はその開校式のもようを次のように生き生きと伝えている。

「期待せし開校式は本日午後一時半、校庭に挙行さる。午前十時ごろまで降りみ降らずの雨も、いつしか打ち止みて、此処校庭は忽ち震い始めて祝声天地を震動して、高く翻る日章旗は隆々たる校運を表すものごとく愈々(いよいよ)弓削事務官および竹ト属(いよ)郡長、郡視学、そのほか多数貴賓臨席の中にいと厳肅に終えたり。式後、酒宴満場に打ち起こり、余興また盛んに歩を進めて、直ちに串良の大地は酔い始めぬ。嗚呼本校の誕生祝いは欺くのごとし。群集約二千余りにして、唯(ただ)本校の盛運を祈るものごとく見えたり」

同校の初代校長には熊本県菊地郡から友添佐一が招かれた。生徒は串良だけでなく東串良、高山、大崎、西志布志などの広範囲から入学した。しかし十周年前後から目に見えて男子生徒が減少した。

これは志布志、鹿屋に中学校が開設されたことや、第一次大戦による好況で都会就職者が増えたことなどが原因とみられる。

大正十二年、このような背景のもとに女子だけの学校となり、校名も「鹿兒島県串良実業女学校」と変わった。このころから二十数年にわたって、同校で教べんをとりつづけた篠原雅雄は当時のことを次のように述懐している。

「笠野原台地は県下有数の養蚕地帯だった。このため生徒が養蚕を勉強するのが、地域の強い要望で、生徒は学校でマユから糸をとる練習をした。その糸を学校が農家から買い上げて、トントトンカランと機織りの練習も重点的に行われた。ミソ、ショウユ、ツケモノのつくり方なども授業で教えた。地域婦人会を対象とする講習会も学校で行われた」

篠原は菊づくりが趣味で、校庭の片すみを利用して、厚もの、薄もの盆栽づくり。懸崖(けんがい)などの盆栽、各種のさまざまの栽培法で絢爛(けんらん)のさまざまのふん困気がを学園にただよわせた。戦時色が強まるにつれて、生徒たちは花も恥らう乙女期にもかわらせず、肥(こえ)タゴをかつぎ農園でひたすら食糧増産に励んだ。またナギナタや消火の訓練なども盛んに行われた。B二九機の空襲が十五日間も連続したなかで、田植え奉仕にも出かけた。学徒動員で海軍串良航空隊に出かけ、神風特攻機を涙ながら見送った。昭和十九年、同校は県下唯一の

女子農業学校となり、校名は「鹿児島県立女子農業学校」と変わった。専攻科も新設された。しかし実質はもう学校といえる経営状況ではなかった。時代は音をたてて変わろうとしていた。



敗戦による混乱は、学園にも津波のように押し寄せた。昭和十九年にスタートした「鹿児島県立女子農業学校」は、敗戦後三年目で「鹿児島県立女子農業学校」となり、さらに二年後に「鹿児島県立商業高校」と改称した。この時点で同校は県立となったのだが、それは商業科に限ったことで農業科や家庭科は依然として町立であった。これは複雑な学校経営を招いたが、複雑なことはまだほかにもあった。そこで学ぶ生徒にしても前身の女子農業学校、青年学校から引き続いて進学してきたものもおり、さまざまであった。なかには兵隊帰りの生徒もいた。年齢もまちまちで、校内に喫煙室も特設されていた。

起となった。同校では特別に「生徒募集主任制」を設け、主任には農業科教諭の末広東蔵が任命された。生徒募集に関する限り、末広は校長よりも強い権限を与えられていた。末広は毎朝、めんみつな作戦をたて、串良町はもとより近郊の青少年をねらうし、同校に入学させる努力を続けた。本人だけでなく、父母も説得しなければならぬ。農作業が終わった時間をみはからって行く。「やまいやめ中の父親にしたたか、ヤマイモ」をほられることも多かった。こうして一時期、農業科は二級にふくれ上がったことがある。しかし六月の農繁期には退学者が相次ぎ、二学期には一学級になってしまった。それでも定員確保の農業科が廃止された状況の中でも同校の農業科は在続した。

この当時の校舎は木造平屋のオンボロ。窓は障子で冬は寒風がようしやなく吹き込み、雨もりはす落ちてきた。講堂は狭いばかりか、床板はあちこち穴があき、ガラス窓は押しも引いてもびくともしなかった。建物のつかい棒もくち果て、使用するのに注意しなければならなかった。

だが、生徒も職員もへこたれはしなかった。むしろ貧弱な情勢を自力で乗り越えようとする雄々しい気迫が学園にみちていた。女子農業学校時代の教諭、釘田稔は当時をこうしのんで語る。「校舎を建築するカワラを、女生徒たちが細山田の海軍基地跡に出かけ、何キ

ロもの道程をウンウンうなりながら背負ってきた。運動場の拡張工事も、細山田青年団の加勢を一日もらっただけで、後は女生徒だけでやりとげた。モッコなども自分たちで作った。また図書館創設の基金集めに演劇など上演、夜をかけて町内はもとより大崎町あたりまで出かけた。一日も早く立派な学校をつくり上げようと、生徒も職員も必死だった。

これより後の学制改革、県営移管のころについては、杵淵久美子（二十六年卒）は、次のように懐かしんでいる。「物資の不自由な時代で、ふるしきに教科書を包み、げたばき、かすりもんぺ、着物などを更生して作ったセーラー服を通学した。先生方もわらぞうりをはいていた。料理の授業でも、サツマイモを利用した献立など代用食の作り方を教わった。私たちはそれでもモリモリ食った。学制改革により、男子のいない学校に男子生徒が入り、学校の空気が一変した。今までの季節の農作物が実っていた畑をつぶし、運動場拡張が行われ、勉強の時間をさいて父母も一緒に砂運びした。」

このような復興の機運が高まるなかで、自治会やクラブの活動も盛んだった。演劇などは男女共学の成果をよくあらわした。弁論部も活発で、民主主義を盛んに論じた。文芸誌「秋瞳」を創刊された主なメンバーは、さきに思い出を語ってもらった杵淵久美子（二十五年、男性組）には安藤一夫（二十五年、農業科卒）らがいる。ついでに紹

地で製茶ひとすじに生き、全国品評会で二年連続産地賞に輝き、農林大臣賞も受賞した。いわば「茶づくり」という詩を、彼は自分の行動でシラス台地に描いてみせたわけである。「秋瞳」は十数号まで続いたが、それ以後は学校新聞「柏葉新聞」に役割を引き継いだ。



農業科は昭和三十七年春、新入生募集を停止した。つまり三年後に同科は廃止されることになったのである。伝統ある科であったが、もう戦後ではないといわれている社会は、農業教育を必要としていないか。廃止がやむをえぬものかという熱い情熱を燃え立たせたのである。農業を学ぶ高校生にとつて最大のあこがれは、全国高校農業クラブ大会に出場することである。それは高校野球の選手が、甲子園出場を夢みるのと同じ気持ちといえる。おりしも三十六年度の全国高校農業クラブ大会は、鹿児島県で開催されることになっていた。一年に一回、各県持ち回りの大会が、地元で開かれるということは、まさに千載一遇のチャンスともいえる。「何が何でもこのチャンスをお逃すな！」という気持ちで校内にみなぎっていた。

大会ではさまざまな競技が行われるが、同校はそのなかの「耕運

機競技大会に出場することにした。選手は農業科の全生徒のなかから厳選した。三年の稲村三郎と段原繁夫、一年の松倉俊幸の三人である。作業の種目は、段原が畑のすきかえし、松倉が畝のみぞたで、稲村は補欠と決まった。ただ補欠は両者の作業をいずれもこなさなければならぬので、練習は二人以上で励まねばならぬ。練習したがつて稲村は主将ともいえる存在だった。指導には末広東蔵ら農業科の全教諭が総力をかたむけた。

ライバルといえばなんといつても鹿屋農高である。県下の歴史と規模を誇る同校は、耕運機競技でも県下のトップクラス。そこで広末らは鹿屋農高に何度もスパイ(?)を送り込み、練習の状況などを調べあげたのである。初めは技術的にかなり立ち遅れていたが、やがて段原たち三人ともめきめき上達した。というのは鹿屋農高は全日制で、練習時間が放課後と土、日曜日しかない。こちらは定時制である。練習時間をたっぷりとれる強味があった。鹿屋市浜田町の田んぼを借りて近くの農家に合宿、職員は交代でつめて朝から晩まで特訓につく特訓がつづいていて、機械の整備もなめずるよう丹念に行っていた。

と関係者は手を握りあつた。しかし喜ぶには、まだ早すぎた。成績発表の結果、優勝は入来農高で串良商高は二位であった。

「あぜに乗り上げた学校がなぜ優勝なのか」と、広末は審査委員にかみついた。が、聞き入れられないとわかると、今度は「地元で開催されるのだから、本県出場校は二校にしてほしい」と申し込んだ。しかし、それも認められなかった。これで全国大会出場の夢は早くもやぶれたのか。広末はがっかりきて鹿屋島市内にある親類の家で一人引き揚げたのである。あくる朝、思いがけないことが待っていた。昨日の成績はアルバイトの鹿大生が点数の計算をまちがっており、実際の優勝は串良商高だ。というのである。

こんなハプニングを経て、全国大会に出場することになったのだが、ここでまた思いがけないことが起きた。開催日の前夜、どういふわけか急に競技のルールが変わったのである。畑に引いた線を残してはならないというのだ。それまで段原たちは、その線を残すための技術を身につけるため、どんなに苦労したことか。広末はまたも「今になつてなぜ?うちの学校だけが不利になる」といきまいた。が、ルール変更を撤回させることはできなかった。

段原と松倉はゼッケンの番で、晴れの全国大会に出場、不利な条件を見事に克服して準優勝に輝いた。これは創立以来の快挙であった。「やればできる」という信念を全校生徒に注ぎ込んだのである。

これを起爆剤に同校はやがてスポーツ・文化の両面で黄金時代を迎えた。廃止される農業科にとつてこれはあまりにも華やかな「白鳥の歌」であった。



農業科は四十年に廃止となったが、この間に優れた人材を社会に送っている。竹之内五男(三十年卒)と西一人(三十一年卒)はブラジルに移住、花木園芸で成功している。また松本優(三十年卒)は郷里の東串良で酪農を経営、乳牛四十六頭を飼育する実績をふまえ、テレビで当時の県知事らと農政を論じたこともあった。

商業高校といえ、一般に商店や会社のひしめく都市にあるものだが、この学校は純農村地帯のただ中であつた。しかも学校のまわりには小さな農家が軒を並べ、ほのかは茫々(ぼうぼう)たる畑が広がっているばかり。校庭にはとほうもなく大きなケヤキが繁り、一時代前をしのばせる木造の校舎は、みるからにいたみがひどかつた。昭和三十六年、県商業教育研究会が串良商高で開かれたとき、全県下から集まった教諭など関係者は、同校の存在に一種の驚きをかきさなかつた。

しかし時間がたつにつれて、この学校にもいわれぬ温かい人の心づかいと、大地からのたのびるかげろふのような意気込みとが、大

らかに、たくましくみなぎっているのが感じられた。昼休みになるると、家庭科の生徒たちが料理した手打ちソバ、甘酒、里芋、甘藷、落花生など、土のにおいのする、ちそうが準備されていた。教諭の一人が「商業科の生徒も肥たごをかっいで学校農園をつくります」と説明した。このとき同校に参集した人々は「ああ、新しい型の商業高校が力強く育つていくのだな」と思わずにはおれなかつた。

串良商高は大隅半島における商業教育のパイオニアといえる。鹿屋商工会議所の珠算能力検定は同校が開かれ、その採点にも同校職員が全面協力した。また同校で中学校珠算競技大会が毎年行われ、遠く志布志中なども参加していつも盛大であった。さらに珠算得意とする職員、生徒がチームをつくり、普及のために大隅半島一円下の中学校をまわつた。なかでも県下の実力をもつ教諭の黒木富子(暗算の名人で、かたわらで教諭の中島森三郎が六ケタの数字を読み上げる)と、即座に黒木が答えを言う。その速さと正確さに、どの中学校でも「まるで魔法使いのようだ」と大きな驚きの声が上がつた。

珠算で初めて県下の栄光に輝いたのは、小浜一男(二十八年卒)である。二十七年のことだ。その後、同校は各大会でめざましい活躍をつづけている。主な成績をあげてみよう。全国大会の県予選で優勝二回(二十九年六月、五十年六月)全九州大会の県予選で優勝二回(四十六年六月、五十年十月)。

県個人総合で優勝二人（四十三年六月の鏡堂利恵子、五十年十月の比良ひとみ）その他、能力一級と実務一級に満点合格を三回も出している。

タイプ部の活動もさかんで、四十六年六月、九州大会に和文の川前恵子ら三人、英文にも三人が出場した。その後、九州大会には四十八年にカナタイプの大江和子ら四人、四十九年はカナタイプの上中野恵子ら四人、英文三人、五十年も和文の前川智子ら五人が出場している。

時代の波にのり数年前、電算機が導入されてコンピュータ同好会も生まれた。桜デパートの販売促進課長、松田二郎（三十二年、商業科卒）は、在学中に電算機練習を紙の上でやらされた。当時の教諭は次のように言った。「アメリカの開発したコンピュータが、すでに日本でも実用化されている。私もまだ見たことはないが、諸君が都会の職場で恥をかかないように資料を集めてきた。電算機はこの図のとおりだから本物のつもりで一生懸命練習しなさい」と。

松田は卒業と同時に大阪のデパートに入社した。そこで間もなく電算機を見た。ああ、これがそうなのか。思わず手を伸ばして電算機をさわってみながら紙で練習した日々を思い出し、目がしらが熱くなった。彼は数年後故郷にUターンして桜デパートに入った。ここには同窓生が多い。本店長として同デパートの経営をとりしきる山之内亘（三十年、商業科卒）をはじめ、西原元一（三十二年、

同）蛭川幸夫（三十四年、同）などの中堅幹部、さらに女子店員まで含めると、串良商高の出身者が一つの層を形成している。

これは桜デパートだけではない。大隅半島の会社、商店、金融、官公署など、どこをみても串良商高の出身者が力強く活躍している。純農村地帯に誕生した商業高校はいま大隅経済の血液をつくる心臓ともいえる存在である。これは決して過言ではあるまい。敗戦の混乱期に場違いともみられる商業高校をつくり、力強く育て上げた地元串良町の先見の明は、いま大きくたたえられるべきであろう。



「料理は今日も俺がゴツ煮をしてやる」――野球部の顧問教師、三善昭男は、町の顔見知りの人たちからもらってきた豚の骨やカライモなどを大鍋にぶちこんで、自分でも名前のわからぬ料理をついた。昭和二十七年といえ、まだまだ食糧難の時代で、都会では食糧ほしさに殺人強盗が横行していた。当時二十五歳の三善は、生徒の期待にこたえて野球部をつくり、率先して指導にあたった。寄宿舎での合宿時には自分で食糧を調達し得意のゴツ煮を作った。「腹いっぱい食えよ」と三善がすすめる選手たちは「うんまかあ」と歓声をあげた。野球部をつくるため三善は生徒

と一緒に旧海軍の笠之原飛行場に行き、まる一日がかりで金網をかつき帰り、その後三日がかりでバックネットを校庭につくった。そのバックネットはいまもソフトボール場で活用されているものである。

甲子園をめざす第二回の県大会に初出場して、串良商高は国分実業と笠沙高を破った。三善がそれを学校に電話で報告すると、校長の浜崎利春は「おめでとー」と答えた。しかし心なしか憂うつげであつた。野球部の鹿兒島市滞在が長びくと、その費用をかきあつめるために、浜崎たちは地域を駆けまわらねばならなかつたのである。

野球部は天保山の旅館に泊まり、米や野菜を持参して来て宿泊がのびるたびに、それを旅館にさし出して宿賃の軽減に努めた。そして帰校すると、選手たちは農村をまわり、懐中電灯を売りさばいて部費の赤字をうめた。

三善が野球部強化のため高山高校から無理に転校させ、ショートを守らせたのが現在、串良町で金物店や鹿屋小野田レミコンを経営し、同町商工会長を務める村上富士雄（二十九年、商業科卒）である。鹿屋市でスーパー「まるはセブンスター」を経営する葉武夫（三十年、商業科卒）も当時のレギュラーの一人である。

柔道五段の三善は、野球部のほか柔道、相撲の指導にもあたった。東串良町柏原海岸での豊年相撲などに同校の相撲部は出場し、ライバルの鹿屋農高としばしば優勝を争った。ある時は授業をさぼって

部員だけでひそかに大会に出場、運よく優勝したのが、優勝旗や商品を持って帰れず、始末に困ったこともある。

三十六年に赴任した校長の松下兼文は、自ら竹刀をふるい寒中げいの陣頭指揮をとるほどのバイタリティーにあふれていた。松下の在任中に運動場が拡張され、また体育館が新築された。これに刺戟されてスポーツ熱がいつきに高まり、女子バスケットの県制覇、柔道、剣道、バレー、庭球の大隅地区優勝と、まさに第一期黄金時代ともいえる情勢がつくり出された。

その後、太陽国体を機に結成されたボート部は、四十五年の国体予選で優勝、岩手国体に出場したのを皮破りに国体出場四回の実力を誇っている。一昨年からは二年連続出場と最近になって実力も安定、県や九州レベルの大会では数々の優勝に輝いている。

ソフト部は昨年、国体の県予選で優勝、九州地区予選に出場した。古タイヤをひきずって運動場を駆け回るなど、男子生徒も顔まげの猛訓練で鍛え抜かれている。また、これからは弓道部にもわかに脚光を浴びている。昨年にひきつづき今年一月の県大会で連続優勝、一年生の平後園寛は、昨年、県高校総体で見事に優勝、全国大会に進出した。バレー、卓球なども県レベル

の上位に昨年は食い込んでおり、串良商高は今まさに第二期黄金時代を迎えた感じである。これらのスポーツとともに珠算

やタイプなどの各クラブも活躍、その遠征費はいくらあっても足りない状況だ。そこで昨年、同窓会やPTAが立ち上がり、卒業生などに「遠征資金のカンパ」を呼びかけ、約二百万円を準備した。この温かい輪のなかで、いま串良良高の生徒は新しい伝統を築こうと、たゆまぬ努力をつづけている。

三善昭男は昨年、同校に教頭としてUターンした。県立移管の二十五年から十年間を同校で過ごし、その後、薩摩半島の各高校をまわって、十八年ぶりの再赴任である。「昔をしのぶものはケヤキとバツクネット、それに卓球場になっていく旧講堂の一部だけで、他には何一つない。学校の施設は立派すぎるほどに整っている。そしてスポーツも文化も、いま大きく花開いている。これは地域の人たちが敗戦後と変わらぬ意気込みで、学校を盛り立てていることにもよる」と感慨深げである。

「校長先生、ぼくに朝礼で演説をさせてください」
河野良幸が、ある日、校長の浜崎利春にこう申し込んだ。浜崎はびつくりして「言いたいことがあったら、まずワシに言え」とうながした。

「実は校内弁論大会で、ぼくは二回連続優勝したため、次回の大会に出場することを断られました。大会に出場できないとなると、全校生徒に語りかける場合は、朝礼のほかにありません」

「何を語りたのかね」
「ぼくは定時制農業科の生徒として、ホームプロジェクトに身を

いれているつもりです。その研究を発表するため、最近県下のあちこちを回ってきました。朝礼で話したいのは、みやげ話です」というわけで、河野は朝礼で演説することを許された。生徒も職員も、果たして何がはじまるのか、期待と好奇心に胸を高鳴らしていた。河野がはじめた話は「ゴボウ談義」であった。

「三尺のゴボウを作るためには、三尺の土を掘らねばならない。珠算の一級をとるには、それだけ努力しなければならぬ。校庭のケヤキも上に出ていっている部分も、地下で根を張っている部分も大きい。学校の施設はみすばらしいが、われらが努力すれば、すばらしい伝統を築ける。」

河野は演説をこう結んで、聞き手の方をうならせた。このため卒業時に彼が持ち回ったサイン帳には、ゴボウ兄貴がんばれ、というたぐいの言葉で埋めつくされた。終戦直後から今日まで、校内弁論大会は絶えたことがない。これは同校のよき校風を育てる一つの母体となっている。つまり相手の意見をよく聴く態度、自分の考えをまとめて発表する力を身につけ、公正なものの見方、考え方、感じ方のできる生徒を育てているのである。

校内弁論大会の優勝者は、県大会に出場する。最近の教諭の藤井竜道、香妻俊昭ら良き指導者にめぐまれ、対外的にもめざましい活躍をみせている。とくに五十年秋には山元一敏が「二本の足」という題で弁じ、県大会、九州大会と

優勝、母校に県初の優勝旗とカップ、それに持ち切れにないほどの賞品を手にして帰り、全校生徒に祝福された。山元の弁論は病身の父親に代わって働く母親のためにフロをわかつて待ち、荒れた足を洗ってあげたことなどを内容に盛り込み、聴衆の胸にせまるものがあった。彼は同じ演題で岡山県倉敷市で開かれた文部大臣旗、全国高校弁論大会や広島県福山市で開かれた選抜全国高校弁論大会にも出場、上位入賞を果たした。

山本が活躍した前後に、二人の女子生徒が県弁論大会で気をついていた。四十九年に県で一位になったのは古庄則子。「泳げる海と青い空」という題で公害問題を取り上げ、「高校生にも公害反対運動はできるはず。健全で美しい郷土をみんなで守ろう」と訴えた。五十年には堂園晶子が「真実の愛にささえられて生きる」で優秀賞をうけています。いまや串良商高は、押しも押されぬ「弁論の名門校」になっている。

このように弁論のレベルアップがなされたことから、昨年の校内弁論大会には審査委員に職員・生徒以外の人物も加えた。そのなかに前述の「ゴボウ兄貴」こと河野良幸もいた。彼は現在、鹿屋信用組合吾平支店長をつとめるかたわら、同窓会長として母校のために惜しみなく尽力している。

校内弁論大会に招かれた河野は上位入賞者五人に、直筆の色紙を額に入れてプレゼントした。書道を得意とする彼の色紙に受賞者は

大喜び、父母からも感謝の言葉が届いた。このため彼は全校生徒に色紙を贈ることを思い立ち、「山中の賊を破るは易し、心中の賊を破るは難し」と七夜かかってしたため、そして二百六十三人の卒業生にその色紙を手渡しながら、彼はこう言った。

「目に見える問題は解決しやすいが、自分の心のなかの問題は目に見えにくく解決しにくい。社会に出て、くじけそうになったら母校で過ごした日々を思い出してください。悲しいときも、苦しいときも、あるいは、うれしいときも。母校を思えば、そこで純粋にひたむきに生きた日々が、心の起爆剤となって蘇（よみがえ）ることでしよう。」



「ややっ、アベックがおぼれているぞ」——宇崎栄二（四十四年、曾於郡志布志町夏井の打出ヶ浜海水浴場で、若いアベックがおぼえていふのを発見した。四十二年八月二十五日のことである。台風一六号の接近で、沖には高波が押し寄せ、遊泳は禁止されていた。アベックはそれをおかして泳いでいるわけだが、いったんおぼれかけると、男は女を沖に残して岸の方へ泳ぎだした。宇崎は「このままじゃ女は死んでしまう」と思い、すぐさま海に飛び込み死にもぐるいで女を救

出した。が、彼は名前も告げずにその場を立ち去った。その年の暮れになって、彼の善行が明るみに出て県教委が表彰した。彼は、はにかみながら、こう語った。「中学二年のとき、目の前で一人の青年がおぼれ死ぬのを見ながら、恐ろしくて手を出せなかったのを思い出して、勇気を出して飛び込んだ」。四十五年一月二十七日、一年生前田のガソリンスタンド前の国道二二〇号線で、自動車にはねられて死亡した。これは同校初めての痛ましい交通事故の犠牲者であった。

これを機に校内で安全な登下校問題が大きく取り上げられた。討議を重ねたすえ、国道を避けた通学路を指定した。しかし国道を横切らないと通学できないため、生徒会役員や風紀管理委員などが、「横断中」の旗などを持って交通整理を行うようになった。運転者からもこれはとても喜ばれた。

「男に勝つと気持ちいいものなのね」――串良町恒例の町内マラソン大会に出場した串良商高の女子チームは、出場二十チーム中十八位の成績。男子チームを二つも抜いて鼻高々であった。四十七年二月のことである。女子チームは町内マラソンに初出場したのは四十年から。六年間、連続最下位であったが、この年は、バスケット部と陸上部の混成チームで出場した。「七回目の出場でラッキーセブり切り」とばかり、選手たちは大張区を走った松川典子は、ともに二

年生で男子選手を三人も追い抜いた。また三年生の窪田静香と東水流まるみは、前日まで卒業試験だったので練習なしの本番に臨んだ。二人とも三年連続の出場だけに試合度胸も万点、最終区を二人のリレーで走り、みごと十八位でテープを切り、「よくがんばった」と町民の拍手を浴びた。

厳寒期の耐寒訓練は、戦後一貫してつづく伝統の一つ。約一週間にわたり毎朝三十分、縄跳びや拳突運動の後、運動場をマラソン。最終日には串良川の土手で、校内マラソン大会を開く。男子生徒は十キロ、女生徒は五キロのコース。男子生徒よりも女生徒が圧倒的に多いため、この日の串良川河岸には冬枯れの景色のなかに、げいたくすぎるほどの「若さ」が咲きにおうのである。戦前の女子実業高校時代は夏期に串良川で水泳大会が開かれ、華やかなふん囲気を盛り上げていたものである。

厳寒期にはもう一つ柔・剣道の寒中稽古も行われる。これも長く続く伝統行事である。一週間の早朝稽古につき、校内武道大会が開かれるのだが、なかに女生徒の姿がまざっているのも珍しくない。竹之内久枝（四十一年、商業科卒）も、その一人である。在学中に剣道初段をとった彼女は、鹿児島交通のバスガイドになり、観光立県の「ミス・ハイビスカス」に選ばれて東京などに東洋のハワイに売帰郷、養豚業をはじめた。数年前に身して鹿屋市でパブレストランを

経営中。いわば串良商高が育てた女性の典型である。

「銀輪ワルツ」は忘れてならぬ名物といえよう。運動場でこれが行われなかったとしたら、なんとも味気ないことである。「銀輪ワルツ」が開始された年はさだかでないが、広大な農村地帯に散在する家から学校に通うため、戦後二十年ごろまでは、自転車を利用する生徒が圧倒的に多かった。このため戦後、運動場で男生徒による自転車での遅乗り競技などが行われたが、これだけでは華やかさがないうという理由で「銀輪ワルツ」が創作された。女生徒が自転車に乗り、その荷台にもう一人の女生徒が花束をもつて立ち、何十組もが運動場いっぱいワルツを舞うさまは、串良商高が誇る芸術ともいえる。



元教諭の末広東蔵が「昭和十五年に旧本館を解体したとき、一枚の“棟板”が出てきた。それは今も学校に保管してあるはず。内容をぜひ『青春有情』で紹介してほしい」と電話してきた。

学校で「棟板」さがしが始まり数人で半月かかった。「棟板」は校長室の書だなの上にきちんと置いてあった。たくみな毛筆で文字が書かれてある。みるみる旧本館は明治二十四年三月二十八日に起工し、同年六月十五日に落成している。総工費は五千五百七円八十銭で、

うち大工に千三百十円、左官に百九十七円八十銭が支払われている。残額は記していないが、おそらく木材などの費用に充てられたのである。また「棟板」には当時の物価がしたためてある。いづれも一石あたりの価格だが、米は五円六十銭、大豆は四円五十銭、粟は三円五十銭、塩は二円五十銭、麦は四円五十銭、酒は二十五円となっている。

旧本館は明治二十四年から昭和三十五年まで使用されたわけだから、かなり傷んでいたという。これらが解体されたのちも、同校にはまだ木造の老朽校舎が残っており、昭和三十七年に赴任した教諭の木下道治は「木造の危険校舎は、雨もりがひどく、教室のあちこちにバケツをおいて雨だれを受けとめた。その音をききながら藤村の詩を読んだりしたものだ。今も思えばある種の風情があった」と述懐する。

現在の串良商高は、鉄筋コンクリート四階建ての本館をはじめ体育館、事務機械や調理、被服の実習室など、堂々たる近代施設を誇っている。施設の拡充にともなう生徒数もしいだいに増え、今では約八百人の大世帯である。商業科単独の学校としては教育水準も高い。今年度の卒業生数は二百六十人で、進学は約三十人。就職する生徒が圧倒的に多い。県内就職は全体的に三分の一で、うち大半は鹿屋、肝属地区である。県外就職は東京や大阪などの大都市が多い。県内外をとわず、もっとも就職先で多

いのは、金融関係で全体の三々四割におよぶ。就職戦線でも金融関係が、同校の場合とみられる金融関係内外の金融関係に就職した先輩たちから、堂々と実績を築き上げてきた。絶対信用できる、という意識が金融関係のなかに大きく耕され、と語る。これはすばらしいことだ

金融関係ばかりでなく、同校の卒業生は各方面で活躍している。この「青春有情」の串良商高編で二日つづけて卒業生の名刺広告が添えられた。それをみたら実に多彩な人材が、郷土で大きくはばたいているのだな、という感慨を抱いた。福村は「このような卒業生の力を借りてこそ、現在の学校は一段と飛躍できる。卒業生で気軽に母校に立ち寄る人が、ほかの学校よりずっと多いのは、実に喜ばしいことだ。同窓会活動も盛んで、昨年は各クラブが大活躍し、その遠征費がたりない事態が起りかけた。多額のカンパを集めてくださった。また、これに加えてPTAも熱心で、最近では学校行事のたびにほぼ一〇〇%の父母が参加される」と頼もしいそう。

福村は剣道五段。不言実行型で「この学校の伝統は、やればできる底力をもっていることだ。これだけは絶対だれにも負けない、といえるものも」と生徒に力説している。いま同校が第二期黄金時代ともいえる情勢を迎えたのは

福村のこのような意気込みと、諸教諭、生徒たちの打てば響く努力のたまものといえよう。福村はぜひ実現したい夢の一つに、ブラスバンド部の設立をあげている。盛り上がる生徒の“やる気”を、さらに上げる生徒の“やる気”を、さうにブラスバンドで鼓舞しようというのだ。また、地域の行事などにブラスバンド部が参加することによって、学校と地域がさらに密接になる、という期待もある。設立のメドは、来年度中にはぜひとも、ということである。

卒業式の前日、福村は卒業生を講堂に集めて「社会に出て独り立ちする諸君だが、さびしくなったり、この学校の校歌をうたいなさい。苦しいときも、くじけそうなきも、校歌をうたいなさい。そうすれば必ず勇気が心の奥底からわきあがってくるはずだ」と励ました。もしも来年度、ブラスバンド部が設立されるなら、その校歌が真つ先に大きなケヤキの枝をふるわせ、そして澄み切った青空に高く響きわたることであろう。

(編集後記)

一世紀を越える本校の歴史で、多くの先輩方がそれぞれの時代を力強く乗り越えてこられた。

私たちは、改めてこの事に思いを馳せ、その精神を受け継ぐとともに、新たな歴史を築く者としての使命感を胸に刻みたい。

